

フランス留学

Institut IMAGINE

谷田 けい

(東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科
発生発達病態学分野)

私は医学部を卒業したあと小児科医として数年勤務したのち、大学院生になり研究生活をスタートしました。博士号をとった後、日本で研究員を1年続け、2022年6月からフランスの首都であるパリにある Institut IMAGINE に留学しています。

もともと研究を始めたきっかけは、小児科医として感染症に罹患する子どもたちを多くみたことから、先天性免疫異常症 (IEI) の研究を行いたいと思ったことでした。Institut IMAGINE は、所属する27の研究室の多くが IEI の研究を行っており、それぞれの研究室は主とする免疫機構や病原体によって独立している一方で、実験手技や実験結果の共有がなされています。週に1回免疫に関わる研究を行なっている PhD の学生が研究室を横断して研究内容を発表する機会もあり、さまざまなことを学ぶことができます。

また、フランス以外の研究者・医師との出会いがあったのもとても大きな経験でした。IEI を研究する医師の多くが参加するヨーロッパ免疫不全症学会 (European Society for Immunodeficiencies: ESID) は学術集会だけでなく、若手向けの勉強会などを多く主催しています。私は、2022年10月にスウェーデンで開催された学術集会と、2023年5月にギリシャで開催された勉強会に参加することができました。特に5月の勉強会では、フランス、スペイン、イギリス、ロシア、ニュージーランド、オーストラリアなど、ヨーロッパを中心に世界各地から30人ほどの参加者が集まり、3泊4日ほぼ缶詰状態で IEI の症例を学びながら交流するというものでした。参加者のレベルが高く、刺激を受けることができました。日本にいと欧州への渡航は時間的にも金銭的にも大事ですので、こういった経験も留学できたからこそと思います。

留学先で経験した非常に興味深かったイベントとして、4年ぶり4回目の開催となった研究資金を集めるための晩餐会 (Heroes for Imagine) がありました。研究所の吹き抜けホールがパーティー会場に変わり、晩餐会中は大手オークション会社協賛で本物のオークションが開催されました。アート作品や有名サッカー選手との食事をする権利など、38点が用意され、なんと一晩で800万ユーロ以上の資金が集まりました。円安の今、円換算すると10億円を超える資金です。晩餐会の最後には、吹き抜けの上階に研究者たちが (普段は着ない) 白衣を着て集まり、参加者から「子どもたちを救う英雄 (Heroes)」として拍手をもらう、というイベントもありました。寄付の文化やオークションがより身近であるフランスならで

はなのかもしれませんが、日本ではなかなか見られない研究資金の集め方を見られる貴重な機会でした。

パリは世界有数の観光地であるため、スリなどの軽犯罪は多く、物価も高めではありますが、街中に歴史的な建物があり、美術館なども多く、ヨーロッパ文化に触れるにはうってつけの場所です。車がなくても週末を有意義に過ごすことができます。また、ヨーロッパ各国へのアクセスも良いため、週末にロンドンやベルギーなどの周辺諸国に旅行に行くこともできます。私の周りのフランス人は非常に勤勉でしたが、同時に休暇も存分に楽しむ人が多く、仕事に集中しながらプライベートも楽しむことができました。

最後に、この貴重な留学経験ができたのは上原記念生命科学財団の助成金のおかげであり、財団の皆様には感謝を伝えたいと思います。この経験を今後の研究成果に反映し、日本の医学に貢献できるよう精進したいと思います。



研究所屋上から見たパリ市内の景色

コロナ後のパリで学ぶ

Hepato Biliary Center, Paul Brousse Hospital
Paris Saclay University

中尾 陽佑

(熊本大学大学院消化器外科学)

私は 2022 年 10 月よりフランス・パリ郊外 Villejuif にある Hôpital Paul Brousse の Centre Hépato-biliaire に留学させて頂いています。年間 150 例ほどの肝移植、300 例ほどの肝切除を行っている肝胆膵外科領域の High Volume Center であり、手術手技や周術期管理の勉強をさせて頂いています。

私が渡仏した 2022 年 10 月は日本ではまだ全国民がマスクを着用している第 7 波と呼ばれた流行期の終わり頃でした。しかし渡仏してみると、街なかはもちろんメトロでもマスクしている人はほとんどおらず、病院ではマスク着用が義務化されているものの、カンファレンスでは医師も顎マスク状態で喋るという状況で、急にコロナ禍が終わった世界に来てやや不安でした。2023 年 2 月には COVID-19 もいわゆる普通の風邪の扱いになり、子供が熱を出して病院を受診した際も、発熱外来などではなく陰性証明も不要でそのまま診察室に通されました。良いか悪いかは別にして、日本より先にフランスはコロナ禍以前の生活に戻っています。

COVID-19 やウクライナ危機の影響もあり、私の渡仏は当初の予定より 1 年ほど遅れることとなりました。長期滞在ビザである研究者ビザをフランス大使館に申請するため、Convention d'accueil と呼ばれる受け入れ協定書がまず必要なのですが、以前とは必要書類が大幅に変更になっていたり、やり取りをする先方の秘書さんがバカンスやロックダウンなどで連絡がつきにくいなど、まず私自身が書類を準備するのに相当な時間を要しました。また原本を直接郵送しなければならない書類がありましたが、ちょうどこの時期にウクライナ危機が始まってヨーロッパ宛ての郵便物が停止されて 2 ヶ月ほど書類を送れない事態にも陥りました。ようやく Convention d'accueil を取得できてもフランス大使館の予約は 1 ヶ月ほど先しか空いていなかったりと、とにかく何事にも時間がかかりました。

私が取得した研究者ビザの有効期限は 3 ヶ月であり、渡仏後すぐに滞在許可証の申請をして取得する必要がありました。以前は移民局 (OFII) に直接行って長時間並んで書類を提出し、それでもうまく対応してもらえなかったり手続きが遅かったりなどで取得までに 1 年ほどかかったこともあったようですが、2020 年頃からは Web 申請システムに変更されており、必要書類提出は pdf のアップロードで行い、不備があってもネット上でのやり取りができてそれなりにレスポンスも早く、この手続きに関しては以前よりかなり改善されている

ようでした。

気づけばあっという間に数ヶ月が経過しました。デモやストライキが当たり前の生活にもようやく少し慣れ、これからは仕事も何とか軌道に乗せたいと思います。

最後に、この貴重な留学経験に際し支援を頂きました上原記念生命科学財団の皆様にご心より感謝を申し上げ、私の留学報告とさせていただきます。



Centre Hpatobiliaire, Hpital Paul Brousse の敷地の一番奥にあります